

鈴木信太郎記念館だより

第10号

邸宅に刻まれたもうひとつの遺構



書斎棟2階再建前に撮影(1956年)

鈴木邸は、1945(昭和20)年4月13日の城北大空襲により木造母屋は全焼。鉄筋コンクリート造の書斎棟1階は焼失を免れましたが、鉄骨造の2階は鉄製フレームを残して焼け落ちました。

実はこの書斎棟、当初の計画では2階の建築は予定していませんでした。1928(昭和3)年の竣工時、屋根は陸屋根で屋上のある平屋でしたが、3年後の1931(同6)年に鉄骨造の2階を増築し「小供室」としました。長男で建築学者・建築家の成文^{ろくやね}によると「書斎の陸屋根に雪が積もると天井スラブが冷え、室内ではガスストーブを焚くので結露して、天井裏に水滴がたれた。これを防ぐために屋根をかけたのだと父から聞かされたが、結露防止に26坪もの大空間とは解せない」²とあります。信太郎が蔵書を守るために耐火構造の鉄筋コンクリート造で建設した書斎棟ですが、コンクリートの性質上、室内外の温度差による結露が生じやすく、本を保護する目的で2階の増築を決意したことが窺えます。設計は、東京帝国大学卒の建築家・粟谷鶉二^{あわやじゅんじ}。工事資料には「小

供室増築工事」とありますが、書斎棟の屋上に鉄骨トラスアーチ架構³を施し、スレート葺き⁴の屋根と全面スチールサッシの突き出し窓という、あたかも工場のような造りでした。柱の数を最小限に抑えて下部の書斎にかかる負荷を軽減し、水はけに富んだマンサード型屋根⁵の鉄骨造が採用されたのです。天井や間仕切りのない開放的な空間は、子どもたちの遊び場となり、信太郎の卓球やゴルフ練習にも活用されました。



鉄骨トラスアーチ架構(書斎棟2階)



ねじ曲がった骨組(書斎棟2階)

戦災で骨組みだけが残された書斎棟2階は、その骨組を再利用して1955(同30)年、成文の設計によって蘇りました。屋根は切妻となり天井が張られたため鉄骨の一部は隠れ、間取りは3室に仕切られました。その後も生活に合わせて改装、補修工事が行われ現在に至っています。しかし、鉄製の骨組みは戦火による熱で曲がった状態のまま、あえて何も施さず戦争の遺構として遺され、今に伝えられているのです。 ※書斎棟2階は、安全対策のため立ち入り禁止としています。

(徳力 まもり)

- 【註】1. 建築計画学を専門とし、東京大学工学部建築学科教授を務めた後、神戸芸術工科大学環境デザイン学科教授、学長となる。
2. 鈴木成文『住まいを語る』(株)建築資料研究社、2002年、p.131 ※スラブ=鉄筋コンクリートの床版。
3. 鉄骨を用いた三角形の部材をつなぎ合わせてアーチ状の大きな曲線をつくった構造物。
4. 材料に粘板岩や石綿などを使用し板状に加工したもので屋根を仕上げること。
5. 屋根の上部が緩やかな傾斜で下部が急勾配となっている形状の屋根。

【参考文献】鈴木成文『住まいを語る』(株)建築資料研究社、2002年

学生時代の堀辰雄の試験答案

— 新発見資料より —

前号の小林秀雄に続き、本稿では今年生誕120年を迎える小説家・堀辰雄(1904-1953)の学生時代の試験の答案をご紹介します。当館で昨秋新たに発見された資料です。

1925(大正14)年4月に東京帝国大学文学部国文学科に入学した堀辰雄。同級には第一高等学校でも一緒だった小林秀雄(1902-1983)、後に親交を結ぶこととなる三好達治(1900-1964)のほか、今日出海^{こんひでみ}や中島健蔵(いずれも仏蘭西文学科)がいました。

一方、1926(大正15)年6月にフランス留学から戻った鈴木信太郎は、仏文科の講師としてステファヌ・マラルメ(1842-1898)やポール・ヴァレリー(1871-1945)ら、フランス象徴派の詩人たちに関する講義を担当していました。堀辰雄は他学科の学生ながらこの講義に顔を出し、学年末試験を受けています。

1927(昭和2)年頃に行われたこの試験には、前述した三好や小林に加え、堀の一年後輩にあたる国文科の臼井吉見^{うすいよしみ}(1905-1987)ら後に文学史を彩る顔ぶれを含む50数名の学生が出席しました。その中でも堀辰雄の回答は印象深かったようで、信太郎は後にこう語っています。

堀君は昭和の初めに東大國文科の學生であつたが、どういふ風の吹廻しか、私の試験に出て来て、十九世紀後半のフランスの詩の展開に關して、明快な回答を書いた。あまり美事だつたから、後で授業の時佛文の諸君に、他學科にこれほど立派な答案を書いた人が居ると話した。これは異例のことだつたから、三十五、六年後の今日まで記憶に残つてゐたのであつた。

(「教師の寶物」)

三好達治も「学年末の試験には堀の答案が抜群だつたさうで、私たち仏文の同期生は鈴木さんから何だか皮肉めいたことをいはれて迷惑を蒙つた。」と冗談交じりで回想しています。

戦後、堀辰雄の答案が先の大戦の空襲に耐えた書齋のどこかに眠っていると、信太郎がゴルフ仲間の角川源義(角川書店創業者)に話したところ刊行の要望があり、書齋を探したものの見つからなかったといひます。この度確認された答案は「象徴派」と表書きされた茶封筒に入って、他の学生の答案とともに書齋の棚の一面に保管されていたものです。

試験問題は三問のうち、二問を選んで回答するもので、堀は(2)の「象徴詩派のévocation[喚起]について」と、(3)の「Narcisse」について」を論じています。後者は水鏡に映った自身を愛したギリシャ神話の登場人物「ナルシス(ナルキッソス)」で、ヴァレリーが生涯にわたって追い求めた主題です。

試験の答案という、時間的、形式的に限られた文章ながら、若き日の堀辰雄の詩情が伝わって来るようです。

(永嶋 里佳)

【参考文献】鈴木信太郎「教師の寶物」、「教師冥利」、いずれも『鈴木信太郎全集』第5巻所収、大修館書店、1973年/東京帝国大学文学部『文学部學生生徒名簿』(自大正15年4月至大正16年3月)/三好達治「堀辰雄君のこと」、『堀辰雄全集』別巻2所収、筑摩書房、1980年

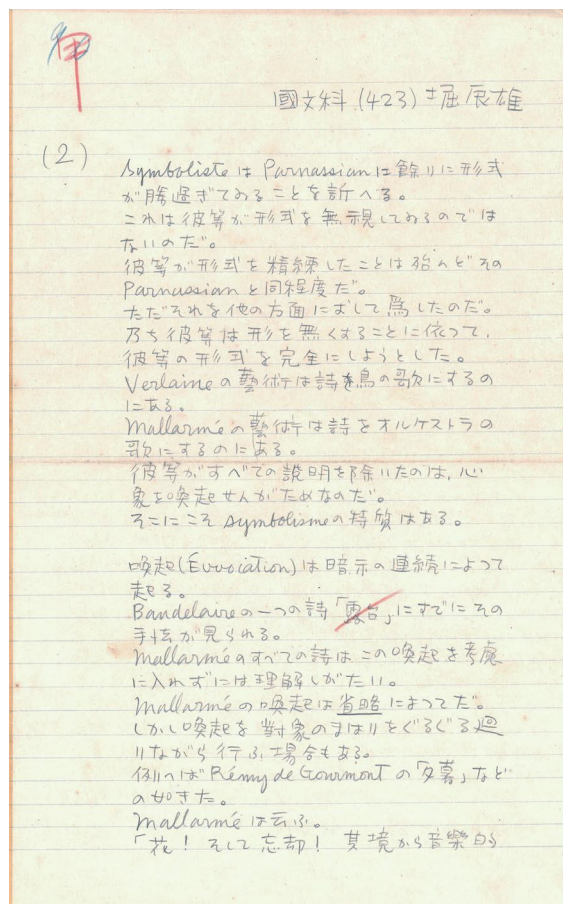


図 学生時代の堀辰雄の試験答案(全3枚のうち1枚目) 1927(昭和2)年頃、当館蔵

<本文> レポート用紙(縦33.3cm×横20.9cm、横罫)全3枚に横書き(裏面白紙)。

筆記具:鉛筆、ほかに赤鉛筆・青鉛筆(採点者使用)。

(1枚目)

甲 90 [採点者加筆]

國文科(423)堀辰雄

(2) Symboliste [象徴派詩人]はParnassian [高踏派詩人]に餘りに形式／が勝過ぎてゐることを訴へる。

これは彼等が形式を無視してゐるのでは／ないのだ。／彼等が形式を精練したことは殆んどその／Parnassianと同程度だ。／ただそれを他の方面におして爲したのだ。／乃ち彼等は形を無くすることに依つて、／彼等の形式を完全にしようとした。

Verlaineの藝術は詩を鳥の歌にするの／にある。／Mallarméの藝術は詩をオルケストラの／歌にするのにある。

彼等がすべての説明を除いたのは、心／象を喚起せんがためなのだ。

そこにこそ symbolisme [象徴主義]の特質はある。

喚起 (Évocation)^[ママ]は暗示の連続によつて／起る。／Baudelaireの一つの詩「露台」*にすでにその／手法が見られる。／Mallarméのすべての詩はこの喚起を考慮／に入れずには理解しがたい。／Mallarméの喚起は省略によつてだ。／しかし喚起を對象のまはりをぐるぐる廻／りながら行ふ場合もある。／例へば Rémy de Gourmontの「夕暮」など／の如きだ。

Mallarméは云ふ。／「花！そして忘却！其境から音樂的

(2枚目)

國文科(423)堀辰雄

(2) に起つて來るものは、觀念で、精妙なそし／てあらゆる花束中には見られない想像の／花だ。」

この言葉こそすべての symbolisteの信條／なのだ。

(3) Paul Valéryは自己を凝視する。／Narcisseが水の面の自分の反映を／見とれてゐるやうに。

その時、Valéryの頭腦の中に一つの／思想が浮んでくる。音律の形式をも／つて。やがて一つの不完全な詩が構／成される。それからだ。Valéryの詩魂／が活動するのは、他の詩人がそれで満足し／ようとするときに。仕上げられた結果／において何等作為のしるしがあつてはな／らない。作為されたものだけでなければ^[ママ]／ならないのだ。これは彼の師 Mallarméの作詩法であると共に Valéryの作詩法／でなければならない。

さういふ態度(それこそ象徴派を決定／するものだ)はこの“Narcisse”の斷片に／もよく窺はれる。／前に述べた如く、これは Valéryの自己／を愛する気持を象徴してゐる。／自己は彼にとつて “plus parfait que／moi-même,^[ママ] [自身より完璧]であり、美しく、眞珠の／青白い肢体をもつた、絹のやうな髪を／もつた、つかのまの不死者だ。

(3枚目)

國文科(423)堀辰雄

(3) しかし、彼と愛しあふと、すぐ影がそれらの／ものを暗くしてしまふ。／そして夜は我我の中を割り、そして／果實を切る劔を我我の間にすべりこ／ませる。／自己を愛することは、また自己を傷ける／ことであつた。

さういふ非常に個人主義な、／近代的な、鋭い自己反省が／この中にもられてあると見る／ことが出来るのだ。

*「露台」の上に取り消し斜線(赤鉛筆で加筆)。

【凡例】原文で改行がある場合は、「／」で示した。筆者による加筆は[]内に収めた。

記念館の恒例イベント —令和5年度の活動から—

口演会「フランス人落語パフォーマー シリル・コピーニ独演会 ^{シェ}chez 信太郎」

開催日時：令和5年9月9日(土) 14:00~15:30

会場：としま産業振興プラザ

内容：第1部 トークショー「RAKUGOでツール・ド・フランス」

第2部 RAKUGO口演

出演：フランス人落語パフォーマー シリル・コピーニ氏

参加人数：23名



高座で熱演するシリルさん

シリル・コピーニさんをお招きした落語イベントは、2018年の開館以来、今回で5回目となります。第1部では母国フランスで行った落語ツアーに関するトークショーで、スライドを交えながら“笑いのツボは文化も言葉の壁も超えて万国共通”と、各地で大盛況だった口演の様子をお話いただきました。第2部のRAKUGO口演は、シリルさんの独演で「饅頭まんじゅうこわい」「お菊の皿」をアレンジした作品二席をご披露いただきました。フランス語を交えた圧巻の落語パフォーマンスで会場は笑いの渦に包まれ、大盛り上がるうちに幕を閉じました。参加者からは、「日仏語混合落語が面白かった。」「フランスでの日本文化受容の様子や落語口演の様子がわかってよかった。フランス語の落語が聞けたのも貴重な経験でした。」「大変面白かったです。次回も楽しみにしています。」といった感想をいただき、盛況を博することができました。

体験教室「クリスマス・オーナメントづくり」

開催日時：令和5年12月10日(日) 13:30~14:30/15:00~16:00

会場：鈴木信太郎記念館(座敷棟)

参加人数：3組7名



イベントの様子(座敷棟にて)

体験教室「クリスマス・オーナメントづくり」は、鈴木信太郎記念館の周知と座敷棟活用を目的に開催しています。小学生以上が参加対象で、広い年齢層の方々にお楽しみいただけるイベントとなっています。オーナメントのモチーフは座敷の欄間や書斎棟のステンドグラスなど。プラスチックの板にモチーフをペンで写し取り、オーブントースターで加熱して自分だけのクリスマス・オーナメントを製作します。玄関ホールに設置したクリスマスツリーに飾り付けるシーンもあり、子どもたちにも好評です。それぞれ個性溢れる素敵な作品に仕上がりに、参加した皆さまに大変喜んでいただいています。「オーナメント作りがとても楽しいです。」「実際の建築から自分で身近なオーナメントを作るというアイデアに感動しました。」「子どももとても楽しく作らせていただきました。」「とても楽しく図案の参考もすてきでした。」「子どもと楽しめるイベントはすてきです。」といった感想をいただきました。(徳力 まもり)

鈴木信太郎記念館だより 第10号

発行日 2024年3月15日

発行 豊島区

編集 豊島区立鈴木信太郎記念館

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-52-3

TEL: 03-5950-1737

<https://www.city.toshima.lg.jp/129/bunka/bunka/shiryokan/suzuki/suzuki.html>



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS